

彼は、思いが伝わらない時には、いつでも、手も足も出るという人だった。つねる、叩く、蹴る…、ひどい時には実習生の腕が、半日で真っ青になるほどだった。さらにその攻撃行動には、常に大声が伴った。「ばーか！」「死んじまえ！」「おばー！」、挑発的な言葉が列挙された。そして、最後には嘔みついた。その行動から逃げようとするれば、さらに行動は強化された。そんな彼も、ご機嫌な時には、昭和演歌の氷雨を「♪飲ませて下さいもう少し♪♪」と手拍子を職員に要求して歌い、その名調子は回りを笑いに包んだ。職員は笑いながらも、いつか豹変して、つねりに来るのではないかと警戒した。

日常的な会話は、単語域。いくら喋ることができると言っても、言葉では気持ちを十分には伝えられないだろう。

家庭は虐待系、両親に捨てられるようにして、二歳からの施設暮らし、最初はその当時の虚弱児施設、その後知的障害児の入所施設を経て、現在は知的障害者の施設入所支援を利用している。

さて、そんな彼のコミュニケーションの受け止めには、支援者の想像力が重要なポイントになる。

例えば…、ラーメンを食べたいという彼の外出要求に沿う形で出かけた中華料理屋で…。

「五目ラーメン来たよ、どうぞ。」の職員の言葉に、彼は即座に「いらない！」の返答。彼の希望通りに注文した五目ラーメンに対するダメ出しに、<だって自分で頼んだのに>なんて思っているうちに、もう彼の手は職員をつねっている。そうこうしているうちに、職員は、彼の猫舌を思い出して、小分けの器を店員に頼む。ラーメンを取り分け、彼の前に差し出すと、今度はご機嫌に食べだす。彼の「いらない！」は「(熱いから)いらない！」だったのだ。

しばらくご機嫌に食べていたと思ったら、また「いらない！」が始まる。<も

うとくくに冷めて来ているのに>なんて思っているうちに、もう彼の手は職員をつねっている。そして、職員は思い出した。彼がシイタケを嫌いなことを。そこで、シイタケを小分けの器から取り出すと、再びご機嫌に食べだす彼。今度の「いらない！」は「(シイタケが入っているから)いらない！」だったのだ。彼自身は、「五目ラーメンがいらない！」なんて言っているつもりは、さらさらしない。だから、<思いが伝わっていない>と感じる彼は、そう思ったとたんに職員をつねってしまっているし、「いらない」の発語に、小分けの器を用意したり、シイタケを取り除くことをすれば、もちろん手は出なくなるし、五目ラーメンはご機嫌のうちに完食だ。

しかし…、残念ながら、通常のコミュニケーションは、私たちの支援現場においても、このようには進まないことが多いのではないか。

おそらく、最初の「いらない！」と職員の手をつねったところで、コミュニケーションはストップだ。せっかくあなたのために注文した五目ラーメンを、「いらない！」なんて言って、職員の手をつねる人は、もう外出はできません、なんて言われて、一口もラーメンを口にできずに、退出なんてことになることが圧倒的なかもしれない。

職員の文脈で捉えるから、「いらない！」は「五目ラーメンがいらない」だけになってしまうのであり、反対に、「いらない！」を彼の文脈で捉えることができれば、「いらない！」という単純な単語でも多様な意味を持ってくるのだ。

それは、「ワンワン」を覚えたての幼児が、「ワンワン」に「これは犬です」以外の多様な意味を持たせると似ている。

さて、あなたはどちらの支援の道を歩んでいますか？「ワンワン」の多様な意味も、幼児の文脈に立っているから、感じることができるんですよ…。